



## I N V I T A T I O N

山梨大学教育人間科学部

第 23 号

March. 19, 2008

---

### 2007年度 前期FDウィーク授業公開のご報告

今年度後期の公開授業は、福永茂先生、池田尚隆先生のお二人が快く引き受けてくださいました。授業者の授業に対する思い、当日の参加者の感想についてご報告いたします。今年度も授業公開にご協力、ご参加ありがとうございました。次年度もよろしくお願いいたします。

#### 第1回後期公開授業

12月13日(木曜日) 1時限「健康科学」共通科目・テーマ別教養科目「人間の生命と健康」

[授業者の思い] というよりは[授業に込める授業者の願い] 授業担当者: 福永 茂 (保健体育講座)

この授業を通して受講生が健康に関わる科学的認識を発展させ、健康問題に対し主体的に取り組んだり解決したりできるようになって欲しいと願っている。そこで、「本講義の願いはあなた方が現在および将来にわたって健康で充実した生活を送ることができるようになるということである。そのためには個人として対処するだけでなく、家族に対して責任を持ち、家族全員の健康を見守ることができるようになるということも含まれる」という言葉で授業はスタートする。続いて「日本の平均寿命は世界一だが、江戸時代の平均寿命は何歳ぐらいだったか」という発問で導入へと進んでいく。受講生を持つ常識的な予想を崩すという中学生向きの授業方法を取るが、といてレベルを下げない教材を選ぶようにはしている。また教育人間科学部よりも医学部や工学部の受講生が多いので、自然科学的な観点のみでなく、歴史的な見方をしたり社会科学的な切り口から展開するようにもしている。90分間の授業を全部で14回じっくりと行うことができるということが最大の利点であり、やはり大学の講義でしかできないことだと思っている。しかし、少々無茶をしようが、怠惰な生活をしようが、若さでカバーできてしまう年齢の受講生に「健康のために云々」といったところであまりピンとはこない。ただ、現在まさに生活習慣病に直面していると思われる家族に対して考えを巡らせたり、いつか自分がそのような状況になったときに適用してもらえたりすればよいと考えている。健康はまことに私的なものであり、健康のために好きな食べ物を制限したり、やりたくない運動を行ったりすることは困難であり、〇〇しないと「病気になる」とか「死ぬ」とか脅かしても行動変容には有効ではない。「なぜ健康でいたいのか」は個人の価値観によるものであるもので、受講生に「将来設計」を立ててもらい、「そのような将来にするためには健康であることが必要なのではないか」ということを考えてもらうようにしている。まあ、この先受講生たちが不健康な生活をしようが、そのあげく生活習慣病になる

うがこちらとしては痛くも痒くもないのだが・・・

**[授業参加者の感想] 教員・学生アンケートの結果**

- ・ 手作りの資料が用意され、キーワードの確認や実例の紹介があり、わかりやすい授業でした。
- ・ 授業進度がやや速い印象がありましたが、資料を使ったり、板書によって丁寧な補足説明がなされるなど理解し易くなるような工夫されていました。
- ・ 前回の復習をしてから本時の内容を板書されたので、授業に見通しが持てました。
- ・ 学生は毎回、授業への質問・意見・感想カードの提出ができ、授業者がそれに対してフィードバックされており、すばらしいと思いました。
- ・ 教室の広さ、受講生数に合った明快で、魅力的な声で授業されており、聞いていて快かったです。
- ・ 授業参加のルールが徹底されており、学生の授業態度もよく、参加型の授業でした。

**第2回後期公開授業**

12月21日(金曜日) 2時限「古典文学演習ⅡA」 専門科目

**[授業者の思い] 授業担当者：池田 尚隆 (国際文化講座)**

公開させていただいた「古典文学演習」は名前のとおり演習科目です。学生が中心になって進めるわけで、こちらはそれをサポートするという姿勢で臨んでいます。

取り上げる作品も彼らを選びます。今回は『源氏物語』紅葉賀巻に決まりました。また、発表者の他に司会も受講生が担当します。司会者は発表者の発言をまとめたうえで、参加者の意見を求め、議論を進めます。次々意見を求められますから、全員が緊張して話を聞かなければなりません。

学習の中心は本文の検討と諸注を参照しながらの読みです。

印刷技術のなかった時代、手で写される過程で本文は原本から離れていきます。現在残されている写本から本来のかたちを推測する訓練が本文の検討です。現在伝わる本文それ自体が大勢の読者、研究者の営為の結果であることを知り、同時にたった一字の違いで作品の印象が随分変わる場合があることを学びます。諸注というのは、800年にわたる『源氏物語』の研究史が生み出した数多くの注釈書です。その成果を踏まえたうえで、自分の読みを考えていくわけです。最低限十種程度は調査しなければなりません、江戸時代以前は注釈自体が古文ですから、読むだけで一苦勞です。

古典作品は作者だけが作り上げたものではありません。長い時間と大勢の人々の手で磨き上げられてきたとも言えるのです。その末席に連なっていることを自覚し、積み上げられた成果を謙虚に受け止めつつ、新しい読みを加えていく。それが古典を読むことだと思っています。その基本だけでも経験し、理解してほしいのです。もちろん1000年前の作品ですから、社会も言葉も変わっています。その違いの説明だけは私の仕事です。学生の発表の間に適宜、口を挟みます。

というわけで、実はFDで取り上げていただくような新しい試みは何もしていません。しかし過去の成果を見つめつつ、ごくごくオーソドックスな方法で学習することの重要性は変わらないと思います。かえって皆さんの参考になることがあるかもしれないと思い、お引き受けした次第です。

**[授業参加者の感想] 教員・学生アンケートの結果**

- ・ 学生が古典の解釈について主体的に授業を進め、討論をし、最後に教師がコメントをするという授業方法が新鮮で大変参考になりました。
- ・ 学生が意見を発表するときには必ずその根拠を求め、学生の意見を尊重しながらも教師が根拠について適切で明快な助言をしており、古典に関する学生の読解力を育成していると思いました。
- ・ 学生が授業の進行をするため、発表者以外の学生もかなり予習をしていました。
- ・ 学生が参加する部分の多い授業にしたいと思っていたので、非常に参考になりました。
- ・ 授業公開参加者のために、源氏物語の様々な写本を用意していただき、ありがとうございました。
- ・ 司会の学生が討論を活性化するようにもう少しリードできるとよいと思いました。

## —「2007年度第13回FDフォーラム」参加報告—

学部FD副委員長 村松 俊夫

3月8・9日の2日間、京都市で行われた「2007年度第13回FDフォーラム」に参加してきましたので、その概要を報告いたします。会場は、京都市北西の金閣寺や竜安寺に程近い立命館大学衣笠キャンパスでした。2日間とも好天に恵まれ、汗ばむほどの陽気でした。

「FDフォーラム」は、財団法人大学コンソーシアム京都が主催しています。この財団は、京都地域近郊（滋賀・大阪地域も一部含みます）の総合大学から単科・短期大学まで、国公立立あわせて50もの大学が参加している全国でも有数の大学連携組織です。そこでは、インターンシップ事業・高大連携事業・共同研究事業・学生交流事業など様々なプロジェクトが進められています。

今回の統一テーマは、2008年4月から実施されるFD義務化にどう対応していくかということで、「大学教育と社会～FD義務化を控えて～」でした。全国から多くの参加者があり、初めて1000名を越えたとのことでした。

以下簡単に、参加したプログラム・シンポジウムタイトルとシンポジストを紹介します。

### ● 3月8日 13:00～開会式

13:20～17:00 全体会シンポジウム（写真上）

「大学教育と社会～FD義務化を控えて～」

- ・中村 正氏（立命館大学教授・教学担当理事）
  - ・飯吉弘子氏（大阪市立大学教育研究センター准教授）
  - ・滝 紀子氏（河合塾研究開発本部教育研究部長）
- コーディネーター・河原地英武氏（京都産業大学教授）

17:15～19:00 情報交換会

### ● 3月9日

10:00～12:00 第3分科会（写真中）

「中小規模大学のFD交流」

- ・高橋 伸一氏（京都精華大学教授・教務部長）
- ・美馬のゆり氏（公立はこだて未来大学教授）
- ・小笠原正明氏（東京農工大学・大学教育センター教授）

13:00～15:00 第2ミニ・シンポジウム（写真下）

「大学の授業は社会の声に応えることができるのか？」

- ・松浦善満氏（和歌山大学教授・同付属小学校長）
  - ・原 清治氏（佛教大学教授・通信教育部長）
  - ・木野 茂氏（立命館大学教授・FDフォーラム企画委員長）
- コーディネーター・松本真治（佛教大学准教授）

今日のFDは、従来の認識とは異なり、単に教員個々の授業方法や教育内容を改善するという狭い範疇にとどまるものではありません。大学設置基準の改正で謳われている内容には「教育研究上の目的の公表」「成績評価基準の明示」なども含まれますが、これらはすでに「学部・学科の教育目標を学則に公表する」「シラバスを学生に公開し成績評価基準を示す」など、本大学・本学部で取り組まれています。つまり、今回の“FD義務化”の本質は、対応する「機関別認証評価」で求められている大学評価基準を厳格にクリアせよという指示なのだとということです。

これからは、それぞれの大学において日常的に行われている教育改善活動を、体系的なFDの中に位置づけ、“大学全体として組織的に支援していくこと”が大切であるということを確認させられました。さらには近い将来において、FDの概念は“教職員のライフサイクル全般を支援していくこと”に変貌していくのではないかとこの予兆を感じさせる会議でありました。



## FDリレーエッセイ第6回

### 語学・文学・教育

英語教育講座 原田 博

生涯学習講座の川村協平教授から、今回のエッセイを引き継いでくれませんか、とのお話がありましたので何気なく引き受けてしまったものの、私の持ち駒の中には、ピグミー族との会見やアラスカに学生を引率した体験談など、内容が人目を引きかつまた直ちにFDに貢献できるようなお話は持ち合わせておりません。アメリカ特にヨーロッパ各地は随分訪れましたが、それはすべて自分の興味や関心の赴くままにしたことで教育への還元という観点が抜け落ちていたと言わざるをえません。川村先生の中身の濃い興味津々のエッセイの後では、私のものは番茶の出がらしのようなものになってしまう、などと恨みごとを言いたくなりますが後の祭りです。

しかし、よくよく考えてみますと、体育的に体を動かすことと語学の訓練には相通じるものがあります。私は、共通英語のシラバスには、語学の時間は実技であるとか、喩えれば柔道の乱取り稽古のようなものである、とか書くようにしております。舌と口をしっかりと確実に動かし、先ず、正確とはいえないまでも、相手に通じる許容範囲内の発音が個々に出来るようになったら、それを単語レベル、次に句、そして文のレベルまで伸展させ、その文意をきちんと伝えるためにリズムやイントネーションをつけて淀みなく発話できるようにならなければ、語学力向上は望めません。そうしなければ、英語を平気で「弁慶なぎなた式」で読んでしまい、ほとんど意味が通じなくなってしまうかねません。このことは、どうすれば鉄棒のさかあがりや綺麗に出来るか、どうすれば綺麗に跳び箱が出来るのか、に通じると思います。修練、修練また修練であり、身体を使う実技に近いのです。この体（全体といわないまでもせめて口先だけでも）を動かすことが、どうも一部の学生にはおっくうらしいのが残念ですが、それを楽しむ方向に導くのが私の務めであることは承知しております。そしてある程度話す口と書く手が動くようになったら、やはり最後は足を使ってその言葉が話されている土地へ行き、その空気と水と料理と酒を味わうこと、また何と言っても、その土地の人々と言葉を交わし合うことが大切でしょう。語学力は、決して、机上のマークシートで計られるものではありませんから。

さて、表題の残り「文学と教育」のことに移ることにいたします。ある学会が2008年度に創立30周年を迎えるにあたり、記念シンポジウムを開催することになり、そのオーガナイザーを務めることになりました。では、テーマをどうするか。「ロマン派と光のイメージラリー」「ロマン派とフランス革命」「ロマン派のシェイクスピア受容」等々、これらはすべてロマン主義研究の定番で、その種のものは何度かパネリストを務めたこともあります。穴場を狙った訳ではありませんが、その主題を「ロマン主義と教育」ということにしました。ご承知のように、この時代（18世紀後半から19世紀初め）では、国民教育（大衆教育）、女子教育、大学教育等々様々な提案や実践がなされた時期であります。ロマン派といわれる詩人・作家・思想家たちもこの動きと無縁の高みにいたわけではありません。先ず、私が19世紀イギリス・ロマン主義と教育を概観し、次にアメリカのロマン派エマソンと、その次に最後のロマン派を自称したイェイツと、そして日本のロマン派（日本浪漫派ではない）透谷・藤村と教育との係わりについて、各パネリストから発言していただき、それを受けてフロアとのやりとりを計画しております。透谷・藤村は教育実践の経験者でもありました。例えば、透谷は日本人最初のクエーカー新渡戸稲造の提言によって設立された普連土女学校（東京・聖坂）の教壇に立ちました。私事に渡って恐縮ですが、私は、新渡戸を敬愛する祖父から、稲造と名付けられるところだったそうです。もしそうなら、人造りといえども聞こえがよい教育界で日々名前負けを感じて過ごさなければならなかったことでしょう。ともあれ、このシンポジウムをどう運営するか、思案の毎日です。

---

\*次年度のリレーエッセイ第7回は佐藤一郎先生（国際文化講座）を予定しております。

学部FD委員会 鳥海順子 村松俊夫 杉浦修 古家貴雄 皆川卓